打田原（うったばる）※方言名：ウッタバル

穏やかな山と海に挟まれた打田原は南から鯨浜・打田原・崎原の３地区からなる集落で、崎原地区は全域が国立公園に指定されています。

小さな集落ではありますが、各種行事や集落運営が盛んで活気があります。哲学者や教育者を多数輩出しており、長寿の集落（シマ）としても知られています。

人形岩（西郷岩）

対岸の龍郷村で暮らした西郷隆盛は、たびたび舟で打田原を訪れ釣りを楽しんだという。崎原先端の岬には、風を受けて立つ人の姿をした岩があり、人々は「西郷岩」「人形岩」と呼んで親しんだ。大戦中には米軍の標的ともなっている。その後、落雷により頭部が崩れ落ち現在の姿となった。以前は付近でジュゴンの回遊する姿も見られた。

サウチ遺跡

縄文時代晩期から古墳時代の長期にわたる集落遺跡で、奄美の考古学上、貴重かつ重要な遺跡である。打田原集落は崎原地区から始まっており、その先端にある「ヒンノ」は「続日本書紀」に記された、遣唐使船の為の碑を建てた場所という説もある。ほかにも崎原地区全域で先史時代の遺物が確認されており、歴史ロマンに満ちた場所である。

崎原海岸・打田原海岸・鯨浜海岸（三浜）

３地区それぞれ民家のすぐ前に砂浜が広がる。美しい景観と共に波や風の合間に鳥や虫など四季折々の音が響く穏やかな静けさが魅力である。打田原・崎原地区ではアダンやオオハマボウが護岸林を形成し集落を守り、その根元ではオカヤドカリをはじめとした生き物たちを育んでいる。

ネガンのイシウシュキ

道路が無い時代各地区は浜伝いに往来しており、崎原地区の南岸にある岩場（ネガンノハナ）を通る際にはサンゴ石を置いていくしきたりがあった。現在でもサンゴ石を置き、対岸の岬先端にあるグンギンサマ（今井権現）に願掛けをする。イシウシュキと呼ばれる場所は崎原地区の他、用安集落にも存在する。また、ネガンハナでは枕状溶岩が見られる。

クサズィ（草瀬）

打田原海岸の北側に位置し、集落で最も大きな岩場である。富士山にも似た岩の頭には、古くから一年中天然芝やボタンボウフウが枯れることなく自生しているため「クサズィ（草瀬）」と呼ばれている。伝統行事サンガツセックの時には弁当を持って貝採りをしたり、岩にのぼり遊んだり、地域住民に古くから親しまれてきた岩である。

ナガネの山々（参詣道）

打田原と崎原の間の山は標高約90mの山がある。頂は北からナガネ、テックワァ、マキ、テンスィ（天子）、ケサンヤマと呼ばれている。ナガネは峰が長いことからその名が付き、ナガネから一望する風景は絶景といわれている。集落から登る参詣道があり、テックワァは9月9日に団子とミキ、ススキを供えて拝んでいた場所であった。

マシュタキ小屋

打田原は海との関わりが強いが、東側の山間は水も豊富でイジュンゴやマタダ（谷戸）、ソテツバテも多い。昔はアダンの木陰で塩焚きをし、物々交換していた。打田原集落では、平成20（2008）年頃から地域活性化のために、塩作りやソテツのデンプン作りなど昔懐かしい味の商品化にも取り組んでいる。

クジラ石

「鯨浜の名前の由来は？」の問いに答えられる古老は少ない。他のシマでは、「昔、クジラを解体する浜だった。ジュゴンもイルカも入っていた」と聞くが、鯨浜の場合は、鯨浜の南側の細長い岩礁が、波が来ると潮を吹くように見えることから「クジラ石」と呼ばれていて「鯨浜」と言われるようになったという。